

看護師特定行為研修 実習開始	3
尾花副センター長就任、宮崎副センター長退任挨拶	4
臨床研修病院 15周年記念同窓会	7
ハビリテーリングセンター 秋祭り	8
鏡川河畔健康ウォーク	10
4委員会合同企画 Autumn Festival 2019	12

www.chikamori.com ● 高知市大川筋一丁目1-16 tel. 088-822-5231
発行●2019年11月25日 発行者●近森正幸／事務局●寺田文彦

ホームページを更新！



診療支援部 部長 山崎 啓嗣
兼 企画課長



1 患者さん(利用者)目線で。

真っ先に目に飛び込んでくるトップページは患者さん向けのコンテンツを集めました。

3月より検討を進めてきたホームページは、10.29に無事リリースを完了しました。約10年ぶりの全面更新となります。

これまでは、所帯の大きな近森病院らしく情報が盛り沢山で、それを増やし続けながらとにかく発信するというスタイルでしたので、コンテンツは年々複雑化し、知らず知らずのうちに使いにくくなっていったように思います。また、この10年間でパソコン画面は高解像度化し、縦横比は横長が主流となりました。閲覧にはパソコンよりもスマートフォンが多く使われるようになり、Webデザインのトレンドも急激に変化してきた結果、既存ホームページは少し賞味期限を過ぎた感もありました。



2

近森の「人」を知ってもらう。



チーム医療の近森。多数精鋭で頑張るスタッフの笑顔がたくさんいただきました。

ホームページは、テレビコマーシャルなどとは違い一方的に情報が飛び込んでくるわけではありません。閲覧者が目的を持ってアクセスされます。それは、受診方法の確認であったり、医師を知りたかったり、近森で働きたかったりと様々です。そのため、訪問者を如何に効率よく欲しい情報につなげられるかが大切で、今回は、①患者さん(利用者)目線で。②近森の「人」を知ってもらう。③自己満足にならない。という3点を意識して作業にとりかかりました。

作業の中で、何よりも苦労したのは情報の整理でした。既存ページは情報量が膨大でその一つ一つが近森の財産とも言えますし、必要性があって盛り込んだ情報をどう取舍選択していくのか、部署の思い入れやこだわりが詰まったものもあり、とにかく関係部署の考えや経緯をしっかりと聞き取り、また「患者さん(利用者)目線でのページ作りをする」ことを理解してもらいながら進めました。

近森病院は、2014年に建築5か年計画を終えてハード面が整いました。このように外観上ひと目で分かるものは理解しやすいのですが、現場でたゆまぬ努力を続けておられる医師や看護師、コメディカルといった「人」の姿、様子、組織風土などはなかなかお伝えすることができていませんでした。新しいホームページでは、写真や動画を多用し少しでも利用者に近森を知っていただけるものに近づけたのではないかと考えています。多くの方々に継続してアクセスいただけるよう更新と情報発信を続けていきたいと思っております。最後になりましたが、ご協力頂いた職員、関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

やまさき ひろつぐ

3 自己満足にならない。

利用者が欲しい情報なのか、本当に有用なのかを忘れずに。





近森会グループおよび各院のキャッチコピーが決定

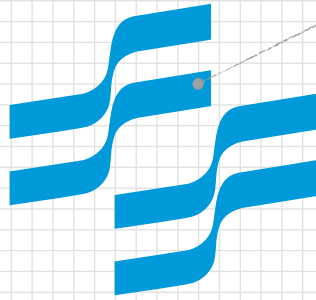
診療支援部 部長
兼 企画課長 山崎 啓嗣

色調はDIC-140

シンボルマークのスカイブルーは高知の青空を表しています。

■ C:80% M:20% Y:0% K:0%
R:0 G:146 B:209

■ C:0% M:0% Y:0% K:100%
R:0 G:0 B:0



シンボルマーク

ffにも見える形は、freedom & flexibilityの頭文字をとっており、自由な発想で時代のニーズに柔軟に対応していくことを表現しています。

一歩先の医療、一つ先の未来。

ここに各院の
キャッチコピー
を表記

CHIKAMORI
HEALTHCARE GROUP



近森会グループ
一歩先の医療、一つ先の未来。

近森病院
命を救う。命をつなぐ。

近森リハビリテーション病院
住み慣れた地域でよりよい生活を

近森オルソリハビリテーション病院
共に歩む。共に喜ぶ。

ホームページのリニューアルにあわせて、近森会グループ、近森病院、近森リハビリテーション病院、近森オルソリハビリテーション病院のキャッチコピーが決定しました。キャッチコピーは、それぞれの病院が患者さんや利用者に対してどのように貢献していくのか、どこを目指していくのかを簡潔に表現したものです。また職員の皆さんが自院の持つ理念やビジョンをしっかりと心に落とし込んでもらうためのものだと思います。ホームページをはじめ、名刺や封筒、各種書類などに積極的に使っていききたいと思います。

今回、キャッチコピーとシンボルマークを組み合わせた新しいロゴマークも左図のとおりデザインされました。近森会グループホームページの「職員専用ページ」からダウンロードできますので、是非ご活用ください。

表彰式 近森病院のキャッチコピー「命を救う。命をつなぐ。」は、職員案を採用。

今回、4施設のキャッチコピーのうち、近森会グループ、近森病院については、職員向けに募集を行いました。その結果、全70の候補があがり、そこから理事会で3案ずつに絞り込んだ上で、最終決選投票が行われました。

近森病院キャッチコピーでは、近森リハビリテーション病院看護部所属の青木孝之さんの作品「命を救う。命をつなぐ。」が選ばれ、9月25日に全部署の所属長が集まる合同運営会議の場で表彰式が行われました。

命を救う。命をつなぐ。

救命の最前線で地域医療を担う“救命救急センター近森病院”の使命を端的に表現したコピーです。

救われた命は、急性期を脱して、リハビリテーション、精神、在宅など次のステージへとつながっていきます。このようなシームレスな医療を展開できるのは、私たち近森会グループの特長であり、近森病院の強みでもあることから、その意味も含めてつなぐと表現しています。

 救命救急センター 近森病院
CHIKAMORI HOSPITAL

近森理事長より

おめでとうございます。近森病院のキャッチコピーをリハ病院のスタッフに取られてしまったのはつらいですけども。(笑)

「表彰状 青木孝之殿。近森キャッチコピー選においてあなたから提案のあった「命を救う。命をつなぐ。」は、近森病院が昭和、平成、令和と七十年以上にわたって続

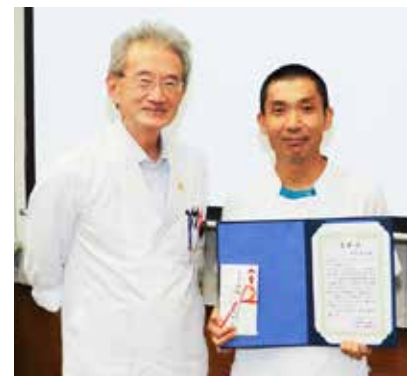
けてきた救急医療の使命を率直に伝え、また回復に向けて連携を図る当グループのつながりをも表現した大変素晴らしい作品

でした。また職員による決選投票では並みいるセンスある作品をおさえ見事最多得票数となりました。ここにその栄誉を称え賞状と賞金を贈ります。令和元年9月25日 社会医療法人 近森会理事長 近森正幸。」



受賞者 青木孝之さん

今回はこのような賞をいただきありがとうございます。考えるときには素直にいろいろな作品を考えさせてもらったんですけど、出来上がった時にはこの言葉が一番シンプルで一番伝わるかなと思い、これにさせていただきました。この度はありがとうございました。





川崎医科大学 麻酔・集中治療
医学1教室教授 中塚秀輝先生

10月23日に、川崎医科大学麻酔・集中治療医学1教室教授の中塚秀輝先生によるご講演が当院管理棟にてあり、聴講させていただきました。

筋弛緩薬の基礎実験的な研究を長年されながら、臨床での麻酔業務で筋弛緩薬を使用されつづけてきた先生による、筋弛緩薬についてのご講演でした。全身麻酔中に筋弛緩薬の効き具合をモニタリングすることはなかなか難しいのですが、そのことから、モニタリングや医療安全管理

周術期の安全性向上を目指して ～筋弛緩管理の観点から～ 「モニタリングの基本は人間」

近森病院麻酔科
部長代行 兼 科長 杉本 健太郎



に話がふくらんでいくようなご講演でした。

「モニタリングの基本は人間であり、モニターの数が増加すれば、その分麻酔の安全性が向上するとは限らない。モニターから得られる情報を認知し、正しく判断・整理するのは人間である」とのお言葉がありま

した。

現在、人工知能やロボットなどの開発が著しく進んでいるようですが、こちらも基本は人間なのかなかと思いました。中塚先生、ありがとうございました！

すぎもと けんたろう



12月の歳時記

ポインセチア

近森病院外来センター
看護師 小笠原 直美



花言葉は「幸運を祈る、祝福、思いやり、慕われる人」。メキシコなどの中南米が原産で、赤・緑・白というクリスマスカラーが特徴的です。赤は「キリストの流した血」、緑は「永遠の命や愛」、白は「純潔」を表します。花びらのように見えている赤い部分は実は「苞葉（ほうば）」という葉っぱで、花びらではないのが特徴です。クリスマスを華やかに演出します。

おがさわら なおみ

看護師特定行為研修

新たに「創傷管理関連」が加わり、 看護師特定行為研修の実習がスタートします。

看護師特定行為研修指導責任者 川村 佳代

当院で看護師特定行為研修が開始し、早くも4年目となりました。本年度は、これまでの「栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連」「血糖コントロールに係る薬剤投与関連」に新たに「創傷管理関連」が加わり、3区分での実習となります。受講生は、栄養コース7名、創傷コース3名の計10名で当院以外にも高知県立あき総合病院、JCHO高知西病院、坂出市立病院などの協力施設にて実習を行う予定です。

6月から10月までは、「共通科目」

を主にeラーニングで学び11月からは、「区分別科目」を受講生自ら模擬授業を行いました。受講生は今後、看護師としての心を携え「手順書を用いた特定行為実践の実習」に臨みます。皆さま、どうぞよろしく願いいたします。

かわむら かよ

前列右から2番目筆者



「乞!熱烈応援」

肩の力を抜いて



近森病院総合心療センター
副センター長兼部長 尾花 智

精神科医として、患者さんをコンテインする能力やわからないことにもちこたえることができる能力などの大切さを感じながら診療しています。当センターは多職種が連携してチーム医療を行っています。これからも優秀なスタッフが力を発揮できる環境を作っていきたいと思えます。肩の力を抜いて頑張っていきたいと思えますのでよろしくお願ひします。

おばな さとし

副センター長退任にあたって

近森病院総合心療センター
前副センター長 宮崎 洋一



四万十川のほとりの単科精神病院に11年勤務した後、明神センター長のお誘いを受けてから早いもので23年の月日が流れました。

自由で自律的に仕事をやらせてくださる寛大な近森理事長のもと、熱心で優秀なスタッフに支えられ、精神科入局以来のお付き合いでずっと釣り友である明神センター長、これまた釣りが縁で近森にきてくれた尾花先生という素晴らしいDr達と一緒に仕事ができ、戦場のような毎日の繰り返しで大変ではありましたが楽しく充実した日々を過ごせました。

いろいろありましたが、印象に残っているのは、リワーク（メンタルな理由で休職している方のリハビリをして就労支援をするという意味）という言葉が使われだす前の2002年、うつ病の方のための就労支援リハビリデイケア「パティオ」を立ち上げ、しばらく採算ベースにのらず苦労したものの約5年で目処がつき軌道にのったことと、救急病院が母体であ

ることから過量服薬・リストカット等の患者さんが多く彼らの衝動性コントロールのための弁証法的行動療法（DBT）を始めたことでしょうか。とはいっても私は思いついただけで実現できたのは苦労して一から作り上げてくれた有能なスタッフ達のおかげです。

同様に近森病院が一般科であることから、摂食障害の患者さんも多く入院も多数経験してきましたが、身体的急変をいち早く見つけてくれる精神科スタッフ、その患者さんをすぐ受け入れて適切に治療して下さる一般科のDr、スタッフのおかげで23年にわたり入院中の摂食障害の方がひとりも亡くならず治療を継続できていることは本当に誇れることであり、有難いかぎりです。

これからも近森病院精神科ならびに近森会の益々のご発展を応援させていただきます。と思っています。

みやざき よういち

看護部 キラリと光る看護

10項目をいかに行うか

回復期リハビリテーション看護師
近森リハビリテーション病院6階病棟東
主任 看護師 中川 正樹

私は2013年度に回復期リハビリテーション看護師認定を取得し質の高い看護・ケアを提供できるように集合教育の企画、運営や現場でのスタッフの教育支援、相談、調整を行っています。

集合教育では新人研修に携わり、「食事は、食堂でよい姿勢で摂取する」、「排泄はトイレで行い、おむつは極力使用しない」、「入浴は週3回以上とし、浴槽に入る」などの、看護の基本的ケア10項目について講師をしています。この10項目を生活の中で実践することが、自立支援に繋がるといった内容の研修をしています。またこういったケアが患者さんの人としての尊厳を守ることに繋がります。

現場では担当患者さんを受け持ちながら、日々のカンファレンスや看護・ケアの場面で、スタッフの教育に携わっています。10項目の実践状況を確認しながら、不十分な場合には要因を多角的に分析し、患者さんやそのご家族のためになるケアの実践ができるような調整を行っています。

今後の課題として集合教育と現場教育を連動させるような、教育の在り方を考える必要があると感じています。

近森リハビリテーション病院初代院長である石川誠先生が「この10項目をいかに行うかで患者さんは良くなる。あなた達、看護師、介護福祉士に期待している。」と言われたこ

▼執筆者前列右端



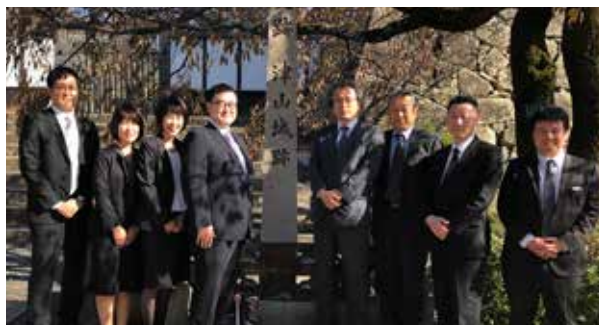
とを思い出し、患者さん、家族が住み慣れた地域でより良い生活を送るためにこれからも活動していこうと考えています。

なかがわ まさき

「患者さんのためにもっといい病院にしたい！」 という想いに溢れた職員の交流

診療支援部 医事課

地域医療連携センター 主任 北川 真也



今年岡山県の津山中央病院が幹事病院となり、全国28病院から316名の参加がありました。当院からは理事長・管理部長を含む9名が参加し、【経営戦略】【看護管理】【働き方改革】【地域連携】【健診事業】【外国人対応】の6つの分科会で、全国各県の地域医療を支える民間病院の皆さんと意見交換やグループワークを行いました。

今回、地域連携の分科会では「逆紹介向上」をテーマに当院の取り組みについて発表の機会をいただきました。逆紹介とは、自院から他の医

療機関へ患者さんを紹介することを表します。当院は地域医療支援病院として「最適な時に、最適な場所で、最適な医療」を患者さんに受けていただけるよう、県内の病院・クリニックとさまざまな場面で日々協力しています。

症状の落ち着いた患者さんの逆紹介推進は20年以上継続しており、他にも連携ガイドブックの配布や他院への訪問・症例検討会によるFace to Faceの関係づくり、公開県民講座・ひろっぱ講座による広報など、こうした活動は年々活発化しています。

分科会では、倉敷中央病院・相澤病院・聖マリア病院・豊見城中央病院といった各県で精力的に取り組まれている医療機関の皆さんとともに発表し、情報共有を通じてさらなる向上に繋がるヒントを多く得ることができました。

なにより、「患者さんのためにもっといい病院にしたい！」という想いに溢れた職員同士の交流は、大変刺激的で有意義なものであると感じた研修会でした。

きたがわ しんや

第8回 ポリオ検診会報告

2019年10月12日



ポストポリオに気をつけて下さい

近森リハビリテーション病院 院長 和田 恵美子

近森リハビリテーション病院ではポリオ罹患歴のある方を対象に、筋力や関節の可動域を測定する検診会を年に一度実施しています。10月12日に第8回が行われ10名のポリオ経験者の方が参加しました。

ポリオは日本では1960年に大流行があり1961年からワクチンが開始、その後撲滅宣言がされています。罹患後は麻痺がのこることが多く、加齢に伴い麻痺がなかった足に力が

入らなくなったり関節が変形したり、痛みがでることがあり、ポストポリオといわれています。

装具作製や調整には専門的な知識が必要となります。今回も5府県から8名の医師と義肢装具士の応援があり、あわせて40名のスタッフで検診会を行いました。来年

も行いますのでポリオの既往のある方がいましたらぜひご連絡ください。

わだ えみこ





7th Triennial Asian Federation of Foot and Ankle Surgeons(AFFAS)に参加して

近森病院整形外科
部長 西井 幸信

10月11、12日の2日間、タイのバンコクで開催された7th Triennial Asian Federation of Foot and Ankle Surgeons(AFFAS)に参加いたしました。

3年ごとに行われる通称「アジア足の外科学会」と呼ばれている学会で、前回は奈良で開催されました。今回は2度目の参加ですが、「日本足の外科学会」で活躍してされている国内の大学、施設から多くの参加者がありました。今年の春まで当科と一緒に仕事をしていた森本麻美(旧姓、藤原麻美)先生も参加していました。

「The treatment with Distal Tibial Oblique Osteotomy(DTOO) for osteoarthritis of the ankle - indication

and surgical procedure -」の演題名で発表を行いました。共同演者である福島県立医科大学外傷学講座・総合南東北病院外傷センターの寺本司先生が考案された「変形性足関節症に対する DTOO」は、人工関節によらない関節形成術であり、国内のみならず、海外にも知れわたってきています。

ここ数年、関節温存手術が注目されていますが、一方で人工関節の開発も盛んになっています。しかし人工膝関節や人工股関節と異なり、足関節は距骨を中心に距骨下関節など隣接関節があり、多くの問題が残っています。

国内の多くの施設では変形の著しい場合は足関節固定術あるいは人工足関節置換術を適応としていますが、共同演者の寺本 司先生をはじめ当院や長崎の N-ASAMI など一部の施設では変形の著しい場合であってもいくつかの工夫をすることで DTOO により、良好な成績が得られており、それについて発表を行いました。

帰国の際には台風 19 号の影響で、ベトナム経由の飛行機に変更するなどのトラブルがありましたが、大変に有意義な学会活動を行うことができました。ありがとうございました。

にしい ゆきのぶ



お弁当拝見 77 私のリセットボタン



お気に入りのわっぱ弁当は、就職して間もなく、初めていただいた給料で購入しました。母親のお弁当には、思い返せば中学1年生のころからお世話になっていて、今もほぼ毎

臨床検査部 臨床検査技師
宮内 保奈実



日つくってもらっています。

蓋を開けると、いつも色とりどりのおかずが敷き詰められていて、仕事モードの心が簡単にリセットされます。今でも大切にしている瞬間で



す。毎朝早起きして美味しいお弁当を作ってくれる母親には、本当に感謝しています。 みやうち ほなみ

全国でスペシャリストとして働く 研修医たちの再会



初期臨床研修管理委員会 委員長
近森病院救急科 科長 三木 俊史

5年ぶりに78名が集う

11月3日に「臨床研修病院15周年記念同窓会」が開催されました。2014年に10周年記念同窓会を開催し、5年ぶりの開催となります。今回は県内外の1期生から今春研修を修了した13期生までの修了生と、現在研修中の14、15期生、指導医などを含め78名が出席してくれました。日々の忙しい業務の中、たくさん集まっていたいただき、前回10周年の際には参加できなかった先生方も今回参加していただくこともでき、県内外から懐かしい修了生の顔ぶれもあり、開会前から久しぶりの再会を懐かしむ雰囲気の中、会が始まりました。

受入準備からの歴史

まず、近森正幸理事長から開会のご挨拶をいただきました。初代プログラム責任者の浜重直久先生の乾杯のご挨拶では、研修医受入開始準備

の苦労話から、第1期生が現れるまでのお話で盛り上がりました。その後は、指導医とは研修当時の思い出話や、直接会うことのなかった先輩後輩の間では、あの噂の先生ですね！という初対面があったり、この雰囲気近森らしい！など、終始話はつきず盛り上がっていました。

15年の研修医思い出今昔

会場内には、各修了生が研修医1年目の4月当時の初々しい集合写真が掲示され、現在把握している所属先と診療科を記載していました。近森病院での研修修了生の進路は、カテゴリーとして全診療科を網羅しており、全国の病院でスペシャリストとして活躍している仲間がいることにとても勇気づけられた同窓会になりました。

途中、学年ごとに順番に壇上へ上がり、修了生から挨拶をいただきました。県内外で働く修了生の活躍を聞き、改めて当院の初期研修の歴史を

感じることができました。私自身、近森病院初期研修医の第1期生であり、指導医も研修医も手探りの状態から、みんなで近森病院の研修システムを作り上げ、現在初期臨床研修管理委員長を務めさせていただいていることに感慨深いものがありました。それも、指導医、研修医、コメディカルスタッフの皆様のご協力のおかげだとあらためて感謝致します。来年度も定員10名のフルマッチがすでに発表されており、昨年には卒後研修評価でエクセレント賞もいただきました。これからも自分が初期研修医だったころの気持ちを忘れることなく、より充実した研修環境を整えられるよう、今後もより一層頑張っていきたいと思っております。

みき としふみ

今回は5年後、20周年同窓会を予定しています。たくさんの仲間に会えることを心から楽しみにしています。

▼第一期生の挨拶





秋祭り 2019 を終えて

高知ハビリテーリングセンター
イベント委員 柏木 雷太



高く澄み渡った秋空の下、
秋祭り 2019 が盛大に
開催されました。



11月4日(月) 天気にも恵まれ、「秋祭り 2019」が催されました。

このお祭りは昨年まで(一社)高知チャレンジクラブ及び(社福)高知県社会福祉協議会主催で実施されていましたが、今年はハビリも主催者側として参加させていただくこととなり例年より飲食出店数や体験コーナーが増え、イベントとしても

大規模なものとなりました。

来場者は園児や児童を中心に千人近くにもなり、各店舗行列を成して昼過ぎには売り切れ続出状態でした。舞台ステージでの演舞・演奏は大いに盛り上がり観客を沸かしていましたが、それに匹敵するほど注目と人気を集めたのが「魚つかみ」でした。丸型ゴムプールで自由に泳いでいる

アメゴを水に入れて満面の笑みで手づかみキャッチする子どもたちの様子は、このお祭りの大成功を表すものでした。

運営側としては来客者に遊園地やテーマパークのアトラクションでは味わえない地域の触れ合いを少しでも感じていただけたら幸いです。

かしわぎ らいた

私の趣味

ファインダーの先には

私の趣味についてお話しします。私の数ある趣味の中で一番は写真撮影です。理由は、ファインダーを覗いている瞬間は何も考えず無になれるからです。悩み事があってもカメラを持ち歩けば解放されます。



秋は紅葉、



冬は雪景色、春は桜を撮っています。そして夏は必ず「よさこい祭り」を撮ります。高知の夏と言えば「よさこい祭り」。撮るだけでは物足りないと2013年から始まった、よさこい写真コンクールへ毎年写真を応募しています。

そしてなんと第1回から今年の第7回の内、4回入選、1回特選をいただきました。流石に7年前のように一日中撮影するのはしんどくなっ



しごと・生活サポートセンターウェブ
事務員 細川 孝行



てきましたが、それでも今年は写真を撮っていた時間はわずか3時間ほどで3000枚以上撮っています。私の目標は、今年で66回を数える伝統ある「よさこい祭り」の写真をずっと長くこの写真コンクールへ応募し続けること。

私のカメラのファインダーの先には、一生懸命楽しく乱舞する踊り子がいます。初めて「よさこい祭り」を見たときの度肝を抜かれたあの迫力。治まらない鳥肌。まだご覧にならない方がない方はぜひ高知の夏を肌で感じてください。きっと虜になるはずです。ほそかわ たかゆき

ハッスル研修医

もう半年

初期研修医 中山 拓紀

こんにちは、初期研修医1年目の中山拓紀です。高知生まれ高知育ちの25歳です。楽しく、時に厳しい研修で充実した日々を送っています。

さて、早朝採血トレーニング・初めての救急外来・緊急呼び出し等でスタートした初期研修も、循環器内科・消化器内科・ERとローテーションさせていただいて、怒涛のように半年が経過しました。

入職当時に比べればできることが増え、少しは成長できているの



かなと思うところです。しかし、まだまだ各所で新たな発見ばかりで未熟さを痛感するとともに、次の半年後には後輩を迎えるという

ことにも気づき、少々焦りも自覚してきました。このペースでいくと、初期研修の残りの期間もあっという間に過ぎてしまいそうですが、その中でも一つ一つ丁寧に研修していければと思います。

なんだか当たり障りの無い文章で面白味は無いですが、自分の性格を一番表現できているのかなと思います。職員の皆様、今後ともどうぞお力添えの程よろしく願い致します。

なかやま ひろき

リレー エッセイ

室戸へ行って来ました！

診療支援部医事課

文書係 國吉 真令



私はこれといって趣味と呼べるものはないですが、車を運転するのが好きでよくドライブがてら出掛けます。

先日、去年オープンして以来気になっていた室戸廃校水族館とドルフィンセンターに行ってきました。

ドルフィンセンターではいろんなプログラムがあり、今回はドルフィンタッチというイルカに触れたり間近でいろんな技を見せてもらえるプログラムに参加。子供達は初めて触れるイルカに大興奮で、とっても喜んでいました。最後はイルカに

ちょっかいをだそうとふざけていた下の子は思っきり水をかけられ、サービス精神旺盛のイルカに皆爆笑でした。私自身もドルフィンセンターは2回目でもドルフィンスイムをしたりとイルカが好きなので数年ぶりに見たイルカにとっても癒されました。

続いて廃校水族館へ。廃校というネガティブなイメージを持ちやすいですが、綺麗にリノベーションされつつ『学校』の雰囲気もしっかり残っていて大人も子供も楽しめる空間になっていました。

跳び箱の中に小さな水槽が入っていたり、手洗い場にも色んな生き物がいて、屋外プールではサメに餌やりもできます。

館内にはベビールームやプレイルームもあり、小さなお子様連れの方にも優しい施設になっているのでまだ行ったことのない方はぜひ足を運んでみてください。

くによし まり



募金箱を近森病院本館総合受付、外来センター、管理棟（職員限定）の各1階に設置しています。皆様のご協力をお願いいたします。

思いつくままに
秋の段 発刊

—好評御礼（既刊分）—
『遺言の代わりに』
(2018年9月20日発行)
『思いつくままに春の段』
(2019年4月1日発行)
『Instead of a Will』
(2019年7月7日発行)



O-リング科の山本重明部長は巻頭で、次のように述べられています。

「欲がなく、あるがままに事実を観察し、あるがままに心に問いかけ、その観察結果をあるがままに表現する。これぞ『あるがままの極意』と言わずして何だろう。」

田村雅一先生の春秋（歳月）を思いつくまま綴った随筆は、まさしく『あるがまま』を習得、会得、体得する絶好の書と心得ます。ぜひご活用ください。（金高堂本店で買えます）。



ニューフェイス

- ①所属②出身地③最終出身校
④自己アピールなど

人の動き 敬称略

● 近森看護学校通信 38 ●

高等教育の修学支援新制度について

近森病院附属看護学校 事務長代理 中山 潤一

近森病院附属看護学校は、2020年度より開始される高等教育の修学支援新制度の対象校となりました。

この新制度は支援対象の要件を満たす学生に対し、授業料及び入学金の減免、給付型奨学金を行う制度です。支援対象の要件を満たすには世帯収入や学業成績・学修意欲の確認などの条件があります。

この制度の指定校は、実務経験のある教員の割以上の配置、社会のニーズを踏まえた意見を、学校運営に反映させられる組織として学校関係者評価委員会の開催、シラバス、成績判定基準やディプロマポリシーの公表が必要となり、本校はそれらの要件を満たしていることを示しています。 なかやま じゅんいち

健康保険組合連合会高知連合会●鏡川河畔健康ウォーク

11月9日(日)に、鏡川河畔約6kmを約100名で楽しみました。



晴天のなかりフレッシュ！



● おめでとう ●

職員対象 第99回

チカモリ・シネマクラブ

2019年10月の診療数 システム管理室

近森会グループ

外来患者数	19,186人
新入院患者数	1,007人
退院患者数	1,035人

近森病院(急性期)

平均在院日数	13.7日
地域医療支援病院紹介率	81.50%
地域医療支援病院逆紹介率	317.95%
救急車搬入件数	583件
うち入院件数	305件
手術件数	453件
うち手術室実施	278件
うち全身麻酔件数	177件

● 2019年10月 県外出張件数 ●
件数 53件 延べ人数 93名

● 編集室通信 ●

早いもので、もう師走。忘年会などのイベントも多くなる。クリスマスケーキの予約もしなければ・・・。大掃除も気になっている。休日にはやるぞ！と決めている。そして、目覚めると暖かいお布団から出られない私の前世は猫であったに違いない。

(にゃ〜で)

自分で楽しいことばかりにしています!

周りに「ネタ」いっぱい

生活場面のちょっとした動作や、周りで起こるあれこれ、そういった何でもが、「ネタ」に繋がりそうに見える。だから、ネタは周りにいっぱい転がっているし、ネタをどう活かす?、何に使う?と、思いを巡らせる。

例えばこんな風に仕事に向き合えたら、その職種は毎日をかなり楽しくしてくれそうだが、歩さんの日々はまさにそんなトーンで流れている模様。

作業療法の魅力

作業療法士を目指したのは、専門学校で教鞭をとる姉から、「資格を持ったらいい。就職しやすいのはリハビリ」とアドバイスされたためだった。大好きな高知で進学就職するためにホームページを調べるうち、「手工芸」の単語に惹かれ、作業療法科に決めた。

作業療法の魅力は、「その人の価値観や生き方、暮らし方など全般を汲み取り、生活全般に関われること」だと感じている。だからといって「こうしてあげたい、こうなって欲しい」と自分のエゴを一方的に押し付けるのではなく、主体はあくまで患者さん。夢中でつい、「こうなって欲しい」を押し付けそうになるとき、「主体は…」と自身に問い直してもいるようだ。

三つのバランスを保つ

就職4年目からの3年半、訪問リハビリを経験し、患者さんの「生活そのものが見える環境」に浸れた。歩さんのやる気と仕事への情熱は沸点、休みも研修に参加し、仕事一色の毎日。

そんな時期を経て研修会への参加がきっかけだったか、「セルフケア、生産的活動、余暇の三つのバランスを保つ」というOTの考え方の基本に立ち返る必要性に気づかされたという。中島美和科長は、「学会発表も意欲的。積極性が仕事の幅を広げ、患者さんの意欲の引き出し方も上手」だと語る。

オフは数多い趣味のなかで、まず山

登りを優先。都合がつく限り、登る。さらに月に一度はオープンマイクのバーでピアノ演奏もする。ひとまえて弾くためには練習も要る。育った家は高知市内の老舗の喫茶店で、小さい頃からピアノが身近にあった。

今年の夏祭りでは小笠原正リハビリテーション部長のギター演奏に合わせてピアノを弾いた。なにごとも、バランスが取れてこそ続けていけることを実感しているし、仕事もオフも「自分で楽しいことばかりになるようにしている」。なるほど、これが楽しむ極意。

医療雑誌『臨床作業療法』に連載

いつも何かに打ち込んでいたいタイプだと自分を分析する。だから、全力疾走というよりコツコツ向き合うのが性に合っているようだ。

この一年余りはずっと全国版の医療雑誌『臨床作業療法』に「OTあゆみちゃんの回復期リハ病棟記」と題する漫画連載を頼まれて続けてきた。雑誌編集長の病気療養のため休刊に入ってしまったが、連載を頼まれたことでモノに対する見方は、ますます「ネタ探し」の目になってしまったと笑う。もともと、「ネタ探し」傾向があったところへ連載を持ち、ますます「目はネター色」になってしまったのだ。

が、むしろそれは楽しいことばかり。連載には、①「作業療法士として、その人の大切な作業を知った上でアプローチしていくヒント」だとか、②「ど

▼患者さんの生活全般に関わるやり甲斐を実感



うなりたいかの患者さんとの目標の合意形成の難しさを実感するエピソード)、③「患者さんの要望と課題を擦り合わせつつ、他職種に求められる情報を伝えられるようになることの大切さ」、④「訓練でできるようになった作業や動作を、いかに日常の生活動作に当てはめていくか」など、実践から得られる貴重なエピソードばかりが並んでいる。

歩さんの毎日は幸せ度を高めるヒント満載であることに気づかされる。

▼ほぼ休みごと、「万難を排し」、山登りに出かけています。それくらい好き…



近森病院 4 委員会合同企画 Autumn Festival 2019 開催!

医療安全管理部
近森病院 副看護部長 近森 幹子



昨年度は、医療安全委員・感染対策委員会の企画で川柳大会を行いました。本年は、10月18日19日に褥瘡対策WG、災害対策委員会も加わり、Autumn Festivalを開催しま

した。各委員会の取り組みを紹介し、それぞれの委員会が職員に啓蒙したいことを楽しみながら体験してほしいとの思いから企画しました。

すべてのエリアを回っていただくために、スタンプラリーで協賛業者提供の商品や各員会の手作り景品などが当たるくじ引きを行いました。景品のハンドクリームや災害トイレ、お掃除クロスも喜んでいただきました。参加いただいた皆様、委員の皆様、協賛業者の皆様ありがとうございました。

後日、Autumn Festival川柳大会の各賞も発表します。楽しみにお待ちください。 ちかもり みきこ



各委員会をはじめ多くの方々の協力をいただき、両日で約290名(スタンプラリー参加者約190名)の職員の皆様にご来場いただきました。今回の企画では、四つの委員会がテーマに合わせ、川柳大会を開催のほか、各委員会エリアを設け活動の紹介や啓蒙を行いました。

医療安全エリア

書類の確認方法の実技演習、高齢者体験や車椅子乗車体験などを企画しました。



実際に経験することにより、確認時の注意点を実感できたのではないのでしょうか。

感染対策エリア



手洗いチェッカーを用いて手洗いの体験を行うことで、手洗いがしっかりできているか目で見て感じていただきました。

褥瘡対策エリア

スキンチェッカーによるお肌の水分量測定を行いました。



乾燥していると思っていた肌が実はしっとり潤っていたり、水分には自信があった方が乾燥していたりと楽しく、お肌の状態を見ることができたのではないのでしょうか。

災害対策エリア



災害食や持ち出し袋の紹介などを行いました。特に起震車体験では、地震の恐怖を身近に感じ南海地震に備えが必要だと再認識できたと思います。



近森病院・近森リハビリテーション病院・近森オルソリハビリテーション病院からのお知らせ

12/31(火)~1/5(日)は休診です ※近森病院 ER 救命救急センターは24時間対応いたします。